

予測文法研究—モダリティ表現の予測能力とその習得について

菊池民子、天野千春、猪狩美保、嶽肩志江、大島弥生、長友和彦

要旨

与えられた言語要素から次にくる言語要素を予測する能力、すなわち予測文法の解明に向け、まず、文という範疇に限定し、モダリティ表現を引き出す文の構成要素の予測機能に焦点を当てた。実験的手法で収集したデータを分析し、考察を行なった。その結果、文頭に提示された「友人に聞くと」という構成要素は、モダリティ表現を予測する決定的な引き金にはならないこと、「友人に聞くと、国際感覚というのは」まで提示したところで、母語話者の75%はモダリティ表現を予測するが、これに対して日本語学習者はほとんど予測できないということ、という二点が明らかになった。本研究は、予測文法という言語能力の解明に寄与する実験的基礎研究である。日本語の予測文法が明らかになれば、それが日本語学習者の文法能力の発達過程の一端を解明する手掛かりとなり得るであろう。

《キーワード》 予測、予測文法、予測機能、言語能力、モダリティ表現

1. はじめに

「いよいよ夏休みが」ここまで聞いたり、読んだりしただけで、日本語母語話者であれば、「始まる」とか「やってくる」などの述語がくるだろうということを予測できる。このように、人間の聴解能力や読解能力には、与えられた言語要素を処理し、意味を理解する能力に加え、それに続く言語要素を予測する能力も含まれていると考えられている。したがって、言語運用能力を解明するためには、予測能力の解明も不可欠であるということが出来る。予測能力が、人間の基本的な言語能力である文法に根ざしているということは自明なことであり、本研究では Oller (1979, 1983) に従い、この予測能力を「予測文法(expectancy grammar)」と呼ぶことにする。予測文法とは、すでにある文法知識を活用し、与えられた言語要素から次にくる言語要素を予測する言語能力のことである。

予測の原因としては、音声、語、語句、文、談話など、言語を構成するすべての要素が考えられるが（注1）、本研究では、文という範疇に限定をし、日本語母語話者が与えられた文の構成要素からどのような他の構成要素を予測するかという予測文法に焦点を当てる。この予測文法の解明をするために、実験的手法で収集したデータの分析をもとに考察を行なう。とくに、どのような構成要素が文末のモダリティ表現の予測に結びつくかに注目する。さらに、日本語学習者にも同様の調査を行ない、モダリティ表現の予測パターンに関して比較を試みる。

2. 先行研究

「予測文法」の研究には、寺村(1987)をはじめとするいくつかの研究がなされている。寺村(1987)では、ネイティブスピーカーの聴き取りのプロセスがどのような仕組みになっているのかについて考察することを目的とし、日本語母語話者を対象として実験を行なった。比較的長めの文を文節に区切り、順番に提示しながら被験者に後続部分を予測させるもので、この結果として、「母語話者は、驚くほどの正確さで先を予測している」と述べている。さらに、①「名詞+助詞」「名詞+助詞」という連なりから、ある一定の動詞を連想する、②①の予測は、その後他の「名詞+助詞」が現れても保持される（予測の先送り）などの結果を得た。

市川(1993)は、寺村(1987)の調査を外国人日本語学習者を対象に行なった。その結果を日本語母語話者のデータと比較し、予測に必要な能力を文構成上の予測能力と語彙上の予測能力に分けてリストアップしている。

これらの研究をふまえて、内田他(1995)では、「が」と「は」の予測機能について日本語母語話者を対象に調査・分析を行っている。ここでは、「が」と「は」が、述語の状態性／動作性、時制、それが付加される主語名詞句のスコープ、さらには後続文の主題の選択、に関わる予測機能を持つことが明らかにされている。

これに引き続き大野他(1995)では、助詞「が」・「の」・「に」の予測機能に焦点を当て、「名詞+の」を主語としてとらえる予測はされにくいこと、「に」をagent markerとしてとらえる予測には特定の言語要素が必要となること、さらに予測には言語外情報が影響を与えること、などを引き出している。

3. 研究目的

3-1. 研究目的

本研究では、先行研究をふまえ、与えられた文の構成要素から、次にどのような構成要素が予測されるかを、まず母語話者を対象として調査した。さらに母語話者と学習者を比較するために、香港大学日本研究科3年生42名（学習時間:300時間程度）に対しても同様の調査を行なった。

今回調査対象とした文は「友人に聞くと」で始まるもので、これによってどのような文末表現が予測されるのか、さらに言えばモダリティ表現は予測されるのか、されるとすればどのようなモダリティ表現であるのかを探ることを目的とした。

3-2. モダリティ表現とは

寺村(1984)によれば、二次的モード（寺村はモダリティといわずにモードという表現を使い、述語の活用語尾をモードの一次的形式、それらに後接し、命題についての話し手の態度を表す形式をモードの二次的形式とした）の助動詞として、前接する文全体が表す内容について話し手の態度、つまりその内容をどのように相手に持ち出すかを表現するものと考えられる。さらに、それらを概言のモードと説明のモードに分け、前者に今回調査対象とした予想、推量、伝聞などの表現を含めている。

益岡(1991)はモードとモダリティをはっきり区別し、モードは動詞類の屈折体系に関わる文法範疇であり、屈折の体系を有する類型の言語（たとえばスペイン語では、直接法、接統法、命令法の区別が動詞の屈折に関与するなど）に対してのみ有意味な概念であるとする。これに対して、モダリティはもっと一般性の高い概念であり、主観性の言語化されたもの、つまり客観的に把握される事柄ではなく、そうした事柄を心に浮かべ、言葉に表す主体の側に関わる事項の言語化されたものと規定する。益岡はこの中で「ダロウ」「ヨウダ」「ラシイ」など、いわゆる「推量を表す助動詞」を真偽判断のモダリティのなかの「断定保留」の表現として位置づけている。しかし、伝聞の位置づけは行なっておらず、今後に残された課題であるとしている。

仁田(1992)では、日本語の文は言表事態と言表態度が層状の構造をなしているとする。言表事態とは、話し手が現実との関わりにおいて描きとった客体的な出来事や事柄を表した部分と規定する。言表態度とは、一つは現実の関わり

における発話時の話し手の立場からした、言表事態に対する把握のあり方、もう一つは言表事態についての発話、伝達の態度のあり方を表したものに分けられる。そして、前者を「言表事態めあてのモダリティ」（その中心は判断のモダリティ）と呼び、後者を「発話、伝達のモダリティ」と呼ぶ。ここにおいて、これまで「伝聞」と呼ばれているものの性格が明示化されなかったことを受けて、推し量り（いわゆる推量の助動詞が表すもの）と伝聞の違いを、直後にその文の成立を否定すること（言表事態成立の否定化）が可能かどうかによって明らかにしている。伝聞は描きとられている内容が第三者の情報からのものであるといった言表事態の仕入れ方に関わっているだけなので直後の否定にも耐えられる。（以下の例文は仁田(1992)による）

・ Aはヨバ、今回ハ首相モ証人喚問ニ応ジルソウダガ、僕ハソウハ思ワナイ
しかし、推し量りの文では、内容成立に自らの判定作用が関わっており、自らがそれを否定することは自己矛盾となる。

*・今回ハ首相モ証人喚問ニ応ジルダロウガ、僕ハソウハ思ワナイ

*・今回ハ首相モ証人喚問ニ応ジルヨウダガ、僕ハソウハ思ワナイ

このように伝聞の意味特性は①言表事態は第三者からの情報である、②第三者からの情報を聞き手に取り次ぐの二つである。

以上のモダリティに対する規定をふまえて、本研究では「友人に聞くと」によって導かれた、いわゆる伝聞、推量、様態などの文末表現を一括してモダリティとし、客観的事実の表現を文末にとっているものを非モダリティとした。

4. 調査方法

今回、調査対象とした文を以下に示す。

友人に聞くと、／国際感覚というのは(,)／何も特別な資質を指すのではな

(1) (2)

くて、／日常接することが多い外国人のことを(,)／相手の立場に立って考

(3) (4)

えられる／想像力を言うようである。

(5) [出典：辻井喬「深夜の読書」より「国際感覚と想像力」の冒頭文（新潮文庫）]

これを上のように全部で5つに区切り、ひと区切りずつ増加するように被験者に示した。被験者にまず(1)の区切りだけを見せて、それに続く文の要素を予測し、文を完成させるという方法を用いた。次に(2)まで、その次に(3)まで

というふうに順次語句を与えて文を完成させた。被験者と調査時期は以下のとおりである。

日本語母語話者

1994年9月	一般成人	22名
1995年5月	一般成人	<u>18名</u>
	合計	40名

日本語学習者

1995年1,2月	香港大学日本研究科3年生	42名
-----------	--------------	-----

文の提示は1994年9月、1995年1,2月の調査では、文を区切りごとに次々に黒板に貼っていき、被験者がいっせいに次の文を予測して紙に記入する方法をとった。1995年5月は、調査対象文を区切りまで書いた短冊型の記入用紙を用意して、被験者に一枚ずつ渡し、記入させる方法で行なった。

5. 分析結果と考察

5-1. 文末表現での分類について

上記のような方法で収集したデータを、①文頭の「友人に聞くと」が、これを受ける文末のモダリティ表現を引き出しているかどうか、②引き出していない場合は、「友人に聞くと」の助詞「と」がどんな役割をしているか、により以下のA～Gに分類した。

〈分類方法〉

モダリティ

- A : ~という・ということ・とのこと…伝聞 例)友人に聞くと/彼は昨日から旅行に出ているという。
- B : ~らしい…伝聞 例)友人に聞くと/今年の夏は暑らしい。
- C : ~そうだ…伝聞 (うち様態1) 例)友人に聞くと/あの先生が 校長になったそうだ。
- D : ~ようだ…様態 例)友人に聞くと~相手の立場に立って考えられる (5) /かどうかということのようだ。

非モダリティ

- E : 条件 例)友人に聞くと/二つ返事で答えてくれる。
- F : 順次性 例)友人に聞くと/やはり同じ答えが返ってきた。

不完全文

- G : 例)友人に聞くと、国際感覚というのは、何も特別な資質を指すのではなくて/個人の感覚である。

A～Dはそれぞれ、文末が伝聞か様態のモダリティ表現になっている文である。Eは「友人に聞くと」の「と」が後件の仮定条件の結果に結びつく用法、Fは後件の動作の順次性や同時性に結びつく用法である。また、Gの不完全文とは、意味は通じるが、文頭の「友人に聞くと」に対応する部分がないものを指す。

以上の観点で全データを分類したのが、《表1》である。

《表1》「友人に聞くと、」とのつながり
日本語母語話者

例数 (%)

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	
モ ダ リ テ ィ	A (～という)	6 (15)	16 (40)	15 (38)	18 (45)	14 (36)
	B (～らしい)	4 (10)	8 (20)	5 (13)	3 (8)	6 (15)
	C (～そうだ)	5 (13)	5 (13)	8 (20)	8 (20)	7 (17)
	(様態)	1 (2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
非 モ ダ リ テ ィ	D (～ようだ)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (2)
	E (条件)	4 (10)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
	F (順次性)	20 (50)	9 (23)	7 (17)	7 (17)	5 (13)
	G (不完全文)	0 (0)	1 (2)	4 (10)	3 (8)	6 (15)
	非文	0 (0)	1 (2)	1 (2)	1 (2)	1 (2)
合 計	40	40	40	40	40	

5-2. 分析結果

以下、4. で示した区切りごとに、言語形式におけるモダリティの出現の有無を中心に分析していく。

(1) 友人に聞くと、／

- ・ 文末にモダリティ表現をとる場合 40%
- ・ “ とらない場合 60%
 - 条件 10%
 - 順次性 50%

例) E. 条件 ①友人に聞くと、二つ返事で答えてくれる。
②友人に聞くと、何でもとても親切に教えてくれる。

F. 順次性 ③友人に聞くと、とてもわかりやすくていねいに教えてくれた。
④友人に聞くと、やはり同じ答えが返ってきた。

この段階では、モダリティより非モダリティを予測する方が多く、全体の6割を占めている。なかでも、「と」を順次性ととらえて予測した例が全体の5割と最も多い。

また、非モダリティを予測した文の後件の主語は、ほとんどが「友人」(70%)で、これを受ける述語は「答えた」「教えてくれた」「知らなかった」などであった。次いで「話者」が20%、これを受ける述語は「言われた」「教えられた」「わかった」であった。このように、予測の内容がだいたい似通っていることがわかる。

モダリティを予測した文では「という・とのことだ」が15%、「らしい」が10%、「そうだ」が15%で、「そうだ」を予測した6例のうち1例のみ様態を表すものがあった。

(2) 友人に聞くと、国際感覚というのは(、) /

- | | | | | |
|------------------|-----|----|-----|-----|
| ・文末にモダリティ表現をとる場合 | 73% | 条件 | — | |
| ・ “ ” とらない場合 | 27% | | 順次性 | 23% |
| | | | その他 | 4% |

例) A. 「という / ということ / とのこと」

- ①友人に聞くと、国際感覚というのは相互の理解から始まるという。
 ②友人に聞くと、国際感覚というのは小さい頃からみがかないといけないということだ。

B. 「らしい」 ③友人に聞くと、国際感覚というのはただ言語だけの問題ではないらしい。

C. 「そうだ」 ④友人に聞くと、国際感覚というのは特別なものではなく、ごく身近なことから身に付くことだそうだ。

ここで、モダリティと非モダリティの割合が(1)から逆転している。つまり、モダリティを予測する文が圧倒的に多くなっており、内訳はAが40%で最も多く、次いでBが20%、Cが13%となっている。

ここでモダリティ表現の予測が40%から73%に増えた原因を考えてみたい。まず、この新たに加わった「国際感覚というのは」を受けてどういう内容が後続するかを調べてみると、以下のようになった。

「国際感覚というのは」を受ける内容

「国際感覚」についての説明…85%

- 例) ⑤国際感覚というのは学ぶものではなく、身に付けるものだ(と断言しました)。
 ⑥国際感覚というのはそう簡単に養われるものではない(と訝)。

「国際感覚」の定義…13%

例) ⑦国際感覚というのは日本をよく知ること(だと聞いた)。

⑧国際感覚というのは幅広い視野と柔軟な心を持つこと(だそうだ)。

その他…2%

「国際感覚」という言葉は定義づけが難しいため、説明にとどまる例が多くなつたのではないかと推測できるが、「友人に聞くと」の後に「国際感覚というのは」という説明や定義を求める内容が来れば、その情報源は「友人」であると考えられる可能性が高くなる。そのために伝聞のモダリティ表現が使われたと考えられるのが妥当であろう。

(3) 友人に聞くと、国際感覚というのは、何も特別な資質を指すのではなくて、／

- ・文末にモダリティ表現をとる場合 71%
 - ・ “ とらない場合 29%
- 条件 —
順次性 17%
その他 12%

ここでは、モダリティと非モダリティの割合に、(2)との変化はほとんど見られない。(4)、(5)でも同様の結果となった。このことから、母語話者の場合、すでに(2)の段階で文末のモダリティ表現の予測ができており、その後はほとんど変化していないことがわかる。

(4) 友人に聞くと、国際感覚というのは、何も特別な資質を指すのではなくて、日常接することが多い外国人のことを(、)／

- ・文末にモダリティ表現をとる場合 73%
 - ・ “ とらない場合 27%
- 条件 —
順次性 17%
その他 10%

ここでは、提示した部分の中に「日常接することが多い外国人のことを」という具体的な対象となる言葉が出てきた。特に「外国人」という語が出てきたことによって、これを受ける動詞の予測が限定される傾向が見られる。たとえば、(外国人のことを)「理解する(しようとする)」とか「考える」「受け入れる」などである。

(5) 友人に聞くと、国際感覚というのは、何も特別な資質を指すのではなくて、日常接することが多い外国人のことを、相手の立場に立って考えられる／

- ・文末にモダリティ表現をとる場合 70%
- ・ “ とらない場合 30% ----- 条件 -----
 - 順次性 13%
 - その他 17%

例) D. 「ようだ」①友人に聞くと～相手の立場に立って考えられるかどうかということのようだ。

G. 不完全文 ②友人に聞くと～相手の立場に立って考えられる謙虚さと優しさと身に付けられるかどうかにかかっている。

③友人に聞くと～相手の立場に立って考えられる感性をいつも持ち続けることである。

ここで初めて「ようだ」という表現の予測が見られた。調査対象とした文では「想像力を言うようである」のように「ようだ」が使われているが、予測文のデータの中ではこの一例しかない。この結果から、調査文が一般的な文体とは言い難いのではないか、と思われる。また、ここで不完全文が多くなってきた。これは、文が長くなるにつれて、母語話者でも文頭の「友人に聞くと」に注意がいかなくなってしまう、受けるのを忘れてしまうためではないかと考えられる。

(6) 友人に聞くと、国際感覚というのは、何も特別な資質を指すのではなくて、日常接することが多い外国人のことを、相手の立場に立って考えられる想像力を言うようである。

- ・第二文の内容 自分の意見 …70%
- 第一文の解釈 …28%
- 意見と解釈の両方 … 2%

例) 意見 ①しかし、多くの人々が国際感覚をこのように認識しているとは、私には思えない。

②私の意見とは全くちがう。

解釈 ③つまり国籍や民族のちがいを越えて相手も自分と同じ一人の人間であることを認識することが第一歩ということであろうか。

④ここでいう想像力とは、イマジネーションのことではなく、あれこれと考えをめぐらすことで相手の立場というものをより深く理解するという意味である。

ここでは一文全部を提示し、これに続く第二文を予測してもらった。内容を見ると、第一文に対する自分の意見を述べているものが7割、第一文の解釈が3割弱を占め、意見・解釈の両方を含むものが1例(3%)あった。

(全体を通して)

ここまでで、(1)から(5)の区切り、さらに第二文の予測の特徴をみてきたが、モダリティと非モダリティの予測については(2)で75%近くの人がモダリティを予測しており、その後の増減はほとんどない。しかし、各被験者について(1)から(5)までのモダリティ出現の流れを追ってみると、次のようになる。ただし、40例中1例はこちらの質問の意図を理解せず、文として成立していなかったため、ここでは全体を39例として分析する。

《表2》 モダリティ出現の流れ

■ : モダリティ文末 □ : 非モダリティ文末 △ : 不完全文 ▲ : 非文

日本語母語話者 (39例)									
	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)				
ア)	■	—	■	—	■	—	■	9	} 23例
イ)	□	—	■	—	■	—	■	11	
ウ)	□	—	□	—	■	—	■	3	

エ)	■	—	□	—	■	—	■	1	} 5例
オ)	■	—	■	—	□	—	■	1	
カ)	■	—	■	—	□	—	□	1	
キ)	□	—	■	—	□	—	■	1	
ク)	□	—	■	—	■	—	□	1	

ケ)	■	—	■	—	■	—	△	1	} 11例
コ)	■	—	■	—	■	—	△	1	
サ)	■	—	□	—	□	—	□	1	
シ)	■	—	□	—	△	—	△	1	
ス)	□	—	■	—	■	—	△	1	
セ)	□	—	■	—	△	—	■	1	
ソ)	□	—	■	—	□	—	□	1	
タ)	□	—	□	—	□	—	□	3	
チ)	□	—	△	—	△	—	△	1	

《表2》は各区切りごとの予測のパターンを図にしたものである。たとえば、ア)は(1)から最後まで一貫してモダリティをとったケースで、全体の39例中9例(23%)がこのパターンにあてはまる。以下、次のようになっている。

ア=(1)から最後までモダリティ…23%	(9/39例)	} 59% (23/39例)
イ=(2)から最後までモダリティ…28%	(11/39例)	
ウ=(3)から最後までモダリティ…8%	(3/39例)	

エ〜ク=一度モダリティ→非モダリティ→モダリティ…13% (5/39例)

[ケ、コ、シ、 ス、セ、チ]	=最終的に不全文になってしまったもの	…15% (6/39例)
	タ=一度もモダリティをとらなかったもの	…8% (3/39例)

ア)イ)ウ)合計で全体の6割が、一度モダリティを予測すると最後まで変化していないことがわかる。(2)、(3)と進むにつれ情報量が増えていく過程で、文末表現もモダリティに収斂していくと考えられる。逆にエ)以下は、次々と情報が増えているにもかかわらず、予測が一つの方向に収束していく形になっていない。エ)〜ク)は、いったんモダリティの文末をとりながら、途中で非モダリティにかわり、再度モダリティの文末に戻っているケースで、全体の13%(5例)を占めている。また、最終的に不全文になってしまっているものが全体の15%(6例)だった。これは(5)の分析でもふれたように、文が長くなるにつれ、文頭の「友人に聞くと」に注意がいかななくなってしまうためではないか、と考えられる。

(日本語学習者との比較)

以上、日本語母語話者の予測パターンについて述べてきたが、ここで、香港大学の日本語学習者のモダリティ出現の流れとの比較をしてみたい。

《表3》

香港大学日本語学習者 (42例)

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	例
ツ)	■	—	■	—	■	1
テ)	■	—	△	—	△	3
ト)	□	—	■	—	△	1
ナ)	□	—	△	—	▲	1
ニ)	□	—	□	—	△	1
ヌ)	□	—	△	—	△	9
ネ)	△	—	□	—	△	1

他は全て不完全文、または非文

《表4》「友人に聞くと、」とのつながり
香港大学学習者

例数 (%)

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
モダリティ A (~という)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (2)	0 (0)
B (~らしい)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
モダリティ C (~そうだ)	4 (10)	1 (2)	1 (2)	1 (2)	1 (2)
(様態)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
D (~ようだ)	0 (0)	1 (2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
非モダリティ E (条件)	2 (4)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
F (順次性)	10 (24)	2 (5)	1 (2)	0 (0)	0 (0)
G (不完全文)	23 (55)	37 (89)	39 (94)	37 (89)	40 (96)
非文	3 (7)	1 (2)	1 (2)	3 (7)	1 (2)
合計	42	42	42	42	42

※途中までしか書いてないものはすべて非文とした。(注2)

- (1) でモダリティをとったもの …10% (4/42例)
- (1) で非モダリティをとったもの…28% (12/42例)
- (2) でモダリティをとったもの … 4% (2/42例)
- (2) で非モダリティをとったもの… 4% (2/42例)

例) * (1)での不完全文

- ①友人に聞くと、陳せんせいとは今月結婚する。
- ②友人に聞くと、先生は病気になったので、休講になった。
- ③友人に聞くと、山田さんは来週香港へ来る。

(1) の区切りまででモダリティの文末を予測したのが42例中4例、そのうち、最後まで一貫してモダリティの文末をとったのはわずか1例であり、他の3例は(2)以降には不完全文になってしまっている。つまり、日本人の予測パターンに合う予測をしたのはわずか1例ということになる。また(1)でモダリティ・非モダリティ合わせて16例だったものが、(2)では、すでに文頭の「友人に聞くと」に注意が向かなくなってしまう、4例にまで減っている。このことは、日本語母語話者の75%近くが、(2)の段階でモダリティの文末を予測しているのと、際立った対照をなしている。以上の結果から、300時間程度の学習者にはこの調査文が難しく、予測が困難であったと考えられる。

6. まとめと今後の課題

以上の分析結果と考察をまとめると、次のようなことが言える。

- ①「友人に聞くと」の「聞くと」は伝聞をはじめとするモダリティ表現を予測する決定的な引き金にはなっていない。
- ②(2)の段階で、母語話者の75%近くがモダリティ表現を予測しているのに比べ、日本語学習者は、逆に、(2)以降ではほとんどモダリティ表現の予測ができなくなっている。

①のように、今回の調査文にはモダリティを引き起こす決定的な構成要素に欠けていることがわかった。冒頭部分の「友人に聞くと」が「友人によると」であれば、母語話者においても(1)の段階でより多くのモダリティ表現が予測されたであろうし、また、学習者においても、300時間程度学習した時点では、すでに「～によると」に呼応するモダリティ表現はほとんど学習済みのはずであるから、より高い割合で予測されたのではないかと考えられる。また、より上級の学習者で調査してみることもについても、再考の余地がありそうである。以上の点を考慮して、現在、調査文の冒頭を「友人によると」にしたもので、母語話者と上級学習者を対象に再調査を実施しているところである。

注1. 予測の要因にはジェスチャーなど言語外要素も含まれるが、ここでは取り上げない。

注2. 途中までしか書いていないようなものを「非文」、一応、句読点まで書いてあるのだが、文の意味が不明瞭なものを「不完全文」とした。

《主な参考文献》

- John. W. Oller(1979) "Language Skill as a Pragmatic Expectancy Grammar"
in *Issue in Language Tests at School* (pp.16-35), Longman
- John. W. Oller(1983) "Evidence for a general language proficiency factor
:an expectancy grammar" in *Language Testing Research* (pp. 3-10), New
York:Newbury House
- 市川保子(1993)「外国人日本語学習者の予測能力と文法知識」『筑波大学留
生センター日本語教育論集』第8号(pp. 1-18) 筑波大学留学生センター
- 内田他(1995)「予測文法研究(1) : 「が」と「は」の予測機能について」
『言語文化と日本語教育』第9号(pp. 134-159)日本言語文化学会
- 大野他(1995)「予測文法研究(2) : 語の担う意味」第10回日本言語文化学研
究会口頭発表
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 寺村秀夫(1987)「聴き取りにおける予測能力と文法知識」『日本語学』第6巻
第3号(pp. 56-68) 明治書院
- 仁田義雄(1992)「判断から発話・伝達へー伝聞・婉曲の表現を中心にー」『日
本語教育』77号(pp. 1-13)
- 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版
- (菊池民子、天野千春、猪狩美保、嶽肩志江；お茶の水女子大学日本語文化
専攻修士1年、大島弥生；香港大学、長友和彦；お茶の水女子大学)